型。B＝結節珠類類円型。肝硬変，IPH 症例の ⅡA，ⅠB，ⅡB 型は75%以上の出血を示し，予防的手術の適応と思われる。IPH に関して，1，胃静脈瘤は B に多い。2．出血はBに多い。3．腹水はAに多い。

23．食道癌の頸部上縦隔リンパ節転移の研究

塚原則幸（千大）

頸部上縦隔リンパ節転移は，予後を左右する重要な因子の一つである。我々は，術前術後にわたり同部の転移リンパ節の発見に CT を応用し検討の末，今後装置の進歩に伴ない一層の期待が持てることを確信した。郭清リンパ節の長径12mm，短径10mm 以上のものは98.6%に転移が認められ，今回使用装置では，これらリンパ節が読影可能であった。

24．灌流肝における栄養成分の代謝について—実験障害肝と Hyperalimentation—

坪井秀一（千大）

Wistar 系ラットに四塩化炭素および ANIT の二種の肝障害を作製し，肝を高カロリー，低カロリー，高アミノ酸の三種にて灌流し肝酵素，肝組織像を検討した。肝細胞障害下でも高カロリー輸液は有効であったが，胆管炎群ではほぼ正常肝と同様の結果を得，肝障害時の高カロリー輸液の適応について，知見を得た。

25．内分泌非活性副腎皮質癌の1治験例

○榎本和夫，宮内大成，渡辺幹夫
蜂巣　忠，柏原英彦，横山健郎
（国立佐倉）

症例は40歳男性。右側腹部痛，悪心を主訴として入院後，レントゲン検査，超音波検査にて右副腎腫瘍を偶然発見し，遠隔転移なしに完全切除し得，また術前内分泌検査にて全く異常を認めなかった症例である。本例は極めて稀であり，Lewinsky らは1974年までに世界で178例と報告しているにすぎない。

26．乳腺葉状嚢胞肉腫の1例

荻野幸伸，原　　壮，木村正幸
（清水厚生）

症例は68歳女性，7～8年前より右乳腺に腫瘤を触知していたが，3カ月前より次第に増大したため来院。根治的乳房切断術施行し剔出標本は最大直径10cm，割面で壊死巣，腫瘤内出血を認めた。組織学的には良性であったが，一部に皮下の増殖像を認めた。経過良好で，現在再発転移は認められていない。

27．慢性好塩基球性白血病に合併した出血性胃潰瘍の1例

織田成人，山室美砂子（千葉社会保険・外科）
重田英夫（千葉県がんセンター）

症例38歳男性。主訴下肢の浮腫，癌痒感。好塩基球増多，Ph_1 陽性，ヒスタミン高値のため慢性好塩基球性白血病と診断され，経過観察中，吐血下血をきたし，緊急内視鏡にて胃潰瘍よりの出血を確認。胃切除術及び摘脾を施行した。術後経過良好である。

28．気泡型人工肺のその後の改良—polyurethane sponge（PUS）酸化筒の開発について—

北川　素，田宮達男，西沢　直
（国立千葉）

充塡量削減により，無血充塡体外循環の適応範囲を拡大する目的で，新しい気泡型人工肺を開発した。PUS 酸化筒の採用により，酸化効率は飛躍的に向上するが，同時に溶血も増大する。酸化断筒面積と高さの関係の適正化にて溶血の軽減を達成した。臨床使用は少数だが，結果は良好であった。

29．上行結腸癌を原発とする腹膜偽粘液腫の1経験例

高崎英己，小沢弘侑，唐司則之
（沼津市立）

腹膜偽粘液腫は，卵票あるいは虫垂を原発とするものが大部分であるが，上行結腸癌が原発と考えられる症例を経験した。患者は67歳の女性で，主訴は腹部腫瘤であり，腹部腫瘤の診断で手術したところ，腹腔内は，膠様物質で占められていた。1979年までの本邦報告例は442例であり，うち結腸を原発とするものは本症例を除いて一例であり，外国文献報告よりも検討して報告した。

30．Appleby 手術により治癒切除しえた異時性多発胃癌の1例

永田松夫，田　紀克，奥山和明
高橋敏信　　（国保成東）

症例73歳男性，初回幽門側胃切除術，Ⅱa＋Ⅱc，tub_2，ly_0，v_0，n（－），ow（－）であった。8年8カ月後今回胃レ線にて残胃癌と診断，Appleby 法胃全摘出術兼肝右側切除を行なった。癌は Borr 2，胃空腸吻合線にかからず，pap，ly_2，v_2 n_4（＋），si（pancreas）であり，異時性多発胃癌の条件をすべて満たしていた。患者は3カ月現在生存中である。